

演 題	腸閉塞を繰り返す利用者様の外泊を通して 学んだ事
副 題	～解放チューブを装着したまま～

フリガナ	コウフアイカワケアセンター
施 設 名	甲府相川ケアセンター
フリガナ	カンゴシヨク サクラバ ミワ
発表者(職名・氏名)	看護職 桜庭 美和
フリガナ	コウフアイカワケアセンター カンゴカ イチドウ
共同研究者	甲府相川ケアセンター看護課一同

【目的】胃瘻造設されている高齢者で、腸閉塞、誤嚥性肺炎を繰り返す方に対し、家族と共に外泊に向けた取り組みを行ったことで、ご家族の反応にも変化がみられ、その結果ご本人様の状態の安定にも繋がった事例を報告する。

【方法】H29.3月初旬にご家族より外泊希望の申し出あり。期間:H28.11.10~H29.10.18

《外泊までの準備》

1. 家族の外泊、手技に対する確認と思いを傾聴する
2. 胃瘻造設、経管栄養について作業療法士、理学療法士、介護職員と勉強会を開催
3. 経管栄養、解放チューブの対応  
長チューブ➡短チューブへ変更。短チューブ折れ曲がりチューブが閉塞してしまうことの予防として、8cm程の発泡スチロールを凹へ加工し対応。
4. 持参物品の確認及び家族へ説明

①高栄養流動食 MA-8、1日 800 kcal朝夕 2回

②ラキソベロン内用液毎朝 10 滴。

現在はラキソベロン内用液 5 滴に変更

③30度ギャッジアップ。右側臥位で2時間かけ注入

④注入終了1時間経過後に解放チューブにつなぐ

⑤解放チューブより流れ出ている物が不消化物で100ml以上の時は注入中止すること

⑥脳梗塞や腸閉塞の前兆と思われる症状（嘔吐した時や意識消失した時など）又いつもと違うと感じた時（以下トラブル）は、救急車を呼ぶこと

【事例紹介】N様：女性 95歳 介護度 4

病名：急性硬膜下血腫 脳挫傷 高血圧症 認知症 糖尿病、(失語症にて意思表示はうなずかれるのみ)

【結果】・H29.5.5~5.6外泊

トラブルなく帰所する。ご家族より、「こんなに母が皆様に手をかけて頂いているなんて思いませんでした。ありがとうございます」と話される。また1泊ではせわしいだけで終わってしまい物足りなかったと話あり。ご本人様に「お家は良かったですか」と訊ねるが口をへの字にまげ難い顔をされる。顔きはなし。表情などからご本人様の満足は得られなかったと感じた。

・H29.6.2~6.4外泊

トラブルなく帰所する。当施設では毎朝、ラキソベロン内用液 10 滴で、排便回数 2~3 回あり。帰所前日に排便がみられていなかった為ご家族に様子を伺うと、外泊初日が下痢に近かった為ラキソベロン内用液 10 滴は入れなかったと判断したとの事。しかしラキソベロンの服用による定期的な排便が重要であることを家族と再度確認した。しかし家族の便の形状による負担を考慮すると、服用量の微量な調節の必要性も感じた。またご家族より労いの言葉を頂いた際に介護職員から「腸閉塞にならないためならおむつ交換なんか、へでもないです」という言葉にご家族は感激された様子だった。

・H29.6.21~6.23外泊

トラブルなく帰所する。2泊の外泊は2回目であり、外泊中の生活のペースを少しずつつかめてきている様子がうかがえた。ご本人様に「お家は良かったですか」と訊ねるとうなずかれ、表情も和らいでいた。

・H29.7.4~7.6外泊

トラブルなく帰所する。ご家族より「次回の外泊は涼くなってからにします。施設での環境はとても家では出来ません」と話しあり。以前は外泊をしたい思いばかりが先行していたが、ご家族が生活環境にも目を向けられるようになっていたと感じた。

【まとめ】全国の胃瘻造設者は 26 万人と推計されている (H23 年度統計)。癒着性腸閉塞・誤嚥性肺炎を 5 回も繰り返していた為、解放チューブを装着したままの外泊が可能なのか、外泊中のトラブルばかりを予測し過ぎていた。その事がご本人様やご家族の思いに寄り添うことを後回しにしていた。ご本人様、ご家族がどの様に生活していきたいのかという思いを確認し合えた事で、外泊に対する具体的なイメージをご家族とスタッフで一致することができた。トラブルばかりを心配するのではなく、ご本人やご家族の思いに気持ちを寄せてケアしていく事が重要であると改めて考えるきっかけになった。全ての利用者様に同じようにサービスが提供できるように繋げて行きたい。